

[公演ノート]

## 教員によるコンサートとアウトリーチの展望

—玉川大学芸術学部／東京ヤマハ銀座店に於ける全館貸切イベントの報告—

# Report on GINZA YAMAHA TAMAGAWA MUSIC DAY —2011 & 2012—

松川 儒

Manabu Matsukawa

## 1. はじめに

本稿は2011年7月と2012年7月に東京銀座のヤマハ銀座ビルで開催された「GINZA YAMAHA TAMAGAWA MUSIC DAY 2011 Vol.1 舞—Mai—」（以下、《2011》）と「GINZA YAMAHA TAMAGAWA MUSIC DAY 2012 Vol.2 瞬—Matataki—」（以下、《2012》）の企画段階からの経過と最終的な成果を検証し提示するものである。

当企画は同大学芸術学部設立以来の初の試みとして、2010年の初夏に起案された。音楽大学ではない総合大学の学部のパフォーミング・アーツ学科（以下、PA学科）全教員（音楽分野）による演奏会自体、一般的にほとんど例がないが、さらにこの分野の代表的企業であるヤマハ銀座店といった一企業の全面協力を得て、芸術分野に於けるお互いの新しき展開と芸術の社会貢献を模索した。企画の最大のポイントは当該全館で朝より閉店までを玉川MUSIC DAYとして、演奏会のみならず様々な音楽展開を散りばめた、音楽イベントとしての新しい形の提示を試みた点である。

## 2. 概要報告

芸術系教員の対外的な研究発表は個人の発表が中心であり、テーマによりグループでの研究があるが、音楽系の教員に於いてはオペラなどの総合芸術を除き、集団で同一テーマのもとで発表するケースはあまり見られない。研究テーマが異なることや、専門とする楽器が広範囲にわたり、その楽器の特殊性や作品の時代の相違、スタイル感の差により同じテーマが定まることはなかなか困難である。そういった個人活動が主とされる中、この企画案発案の時はまさに東北大震災後であり、その多大な被害と積み重なった疲労に対し“祈り”というキーワードを中心に音楽界はチャリティー公演やボランティア公演を多く開催した。我々音楽研究室でも個人の力では成し得ない集団での社会貢献を目標とし、その成立の為にテーマを模索した。そろそろ鎮魂と祈りを越えたテーマで、この閉鎖的な時代にこそ敢えて明るい統一テーマで、教員の集団発表を生に、直に、学生へフィードバックすることとし、そしてさらに展開は演奏会を中心に大規模な催しとして音楽祭の形で企画された。

教員が集まりコンサートを打つだけでは、日々開催される演奏会となんら変わりはない。我々の目的はまさに芸術の社会貢献と内外へのフィードバックである。よって、企画は多岐にわたり一日音楽祭の形が望ましいという起案に落ち着く。教員によるコンサートをメインとし、しかしその教員によるコンサートも選出された優秀な卒業生の出演から開幕し、これまでの玉川大学芸術学部の成果披露として、また今後の学生の目標となろう将来像を明確に提示した。別会場では教員によるワークショップや講座を打ち、ソワレ公演として、学生のオーディション合格者による演奏会、そしてヤマハ銀座店地下のスタジオでは本学部メディア・アーツ学科（以下、MA学科）によるコンピューター音楽の発表を舞台準備からコンサートまでを公開にし、全館あげての玉川大学の音楽系発表とした。

1. 教員によるコンサート（有料） 於 ヤマハ銀座店 ヤマハホール
2. 教員による作品発表（無料） 於 ヤマハ銀座店 地下スタジオ
3. 対象を問わない一般向けアウトリーチ講座 於 ヤマハ銀座店 ロビーホワイエ
4. 修得成果の社会的な教育評価～オーディション合格者（学生）による特別演奏会～  
於 ヤマハ銀座店 ヤマハホール
5. 今後への反省点
6. おわりに

### 3. 教員のコンサート

前述したように“祈り”に変わるテーマは2011年が《舞》、そして2012年は《瞬》であった。漢字一字で簡潔に統一するアイデアはインパクトあるテーマと単純軽快なわかりやすさで即決された。問題はその一字がそのまま曲の選択に繋がることで、教員の研究分野とのすり合わせはたやすいものではない。その一字から想像する哲学的解釈も含みプログラミングは熟考された。

もちろん、わかりやすく親しみやすい高度さは欠如できないので、大学内外に通用する選曲には苦勞した。重要なのはコンサートを開くことだけではなく、そのあとの学生へのそして社会へのフィードバックである。その影響は確かな足跡と質の高い高度な文化を提供しなければならない、そんな使命が課せられていると自覚している。そうであるから真剣な取り組みや演奏そのものは表裏ない影響力として教員のFDとしてもベールの一切かからないそのままの形でお見せすることとなる。

2011年と2012年共々開幕は卒業生の選抜者で、玉川大学が文学部の頃より取り組んできた本物の育成の成果を発表。大学院生として勉学を続ける若き学生から、留学後に帰国し活動を始めた卒業生。そしてすでにオペラ界で頭角を現してきたその分野のホープの出演も組まれた。

#### 《2011》

《舞》は震災後に敢えて選択したテーマで、《舞》こそ人類古代より“歌”と共に冠婚葬祭のみならず、豊作の祈りから神との交信まで、人類の一生に並列していたものである。

また、「舞」は舞台の一字。芸術分野はすべて舞台の上で展開されると言っても良く、初回のテーマとして最適と思われた。プログラムの要は最終プログラムのまさに《舞》そのものである室内楽曲・プーランク作曲の《仮面舞踏会》であった。これはその機知にとんだウイットさでエスプリの極致とさえいえる彼のセンスが光る名曲であるが以外に演奏される機会が少ない。演奏を困難にしている要因はその編成の偏屈性と演奏上のテクニックの難しさに他ならない。編成はPf. Vn. Vc. Ob. Cl. Fg. Cor. Perc. そしてヴォーカルが加わる。この曲を最後にその前には《舞》のテーマのもとソロからア

ンサンブルまで様々な編成で古今東西の名曲が配置された（全プログラムは後述）。演奏と司会に全専任教員が出演し、曲目により非常勤講師の助演を得た。

### 《2012》

タイトルの《瞬》は閉塞感ただようこの時代へ〈一瞬への全力を〉との思いから浮上したテーマである。前年同様に、要は最終プログラムに配置され、今年度は室内オペラ《河童譚》を取り上げた。

そして初の演劇系教員との共同制作が実現した。小規模でもオペラは総合芸術であるから、玉川大学芸術学部の演劇と音楽とのコラボレーションの威力発揮には格好の演目であり、演出は演劇系教員の太宰久夫教授が受け持った。銀座という土地柄、しかしコンサートホールという点を大いに考慮し、舞台装置は椅子のみの簡素だが質の良い“和”の舞台を作り上げるプランが立てられ、最大の目玉は正式なる羽織、袴の和装。出演者全員が舞台上で演ずる瞬なエンターテインメントを目指した。特筆すべきはこのオペラには音楽教員の衣裳付けを同教員のプロの舞踊家小山正教授が担当した事である。舞台の表も裏も教員の真剣勝負である。そして、このオペラの前には今年度は非常勤講師に出演を依頼し、同大学の講師陣の紹介と華やかさを打ち出すため、前年同様、ソロからアンサンブルまで各国の多岐にわたる時代の楽曲が選曲された。

## GINZA YAMAHA TAMAGAWA MUSIC DAY 2011

2011/7/2 (Sat.) ヤマハホール

17:00開演 芸術学部教員による演奏会—舞—

Pf. solo 絵画的練習曲 Op. 33-2, 9/S. ラフマニノフ

林 京平 (Pf) (2011卒)

Bass solo 楽劇《マイスタージンガー》より「マイスター達の芸術を尊敬しなさい」

/ R. ワーグナー 大塚博章 (Bar) (1993卒)・松川 儒 (Pf)

Fl. Duo 3つのダンス / G. ショッカー

向山光則 (Fl)・鶴谷 幸 (Fl)・中村岩城 (Pf)

Bar. solo 木兎 / 中田喜直・歌劇《道化師》より「皆様、ご免くだされ」

/ R. レオンカヴァッロ 馬場眞二 (Bar)・小佐野圭 (Pf)

・・・・休憩・・・・

Org. solo 《組曲 Op. 5》より シシリエンヌとトッカータ / M. デュリュフレ

中村岩城 (Org)

Ten. Pf. 3つの歌 / W. ウォルトン 辻 裕久 (Ten)・松川 儒 (Pf)

Pf. solo 練習曲 Op. 25-1・英雄ポロネーズ / F. ショパン 小佐野圭 (Pf)

Ensemble ~玉川カンマーアンサンブル2011による~

(馬場眞二・小倉達夫・ベアンテ・ポーマン・市原 満・畑中真理・大埜展男・真野亜莉沙・

永曾重光・松川 儒)

F. プーランク作曲 世俗カンタータ《仮面舞踏会》より

・序曲と華やかな歌

- ・間奏曲
- ・盲目の婦人
- ・フィナーレ

---

専任教員 向山光則（フルート）辻 裕久（テノール）馬場眞二（バリトン）小佐野圭（ピアノ）松川 儒（ピアノ）中村岩城（オルガン）野本由起夫（司会）  
非常勤講師 小倉達夫（ヴァイオリン）/ベアンテ・ポーマン（チェロ）/市原 満（オーボエ）  
/畑中真理（クラリネット）/大埜展男（ファゴット）/永曾重光（打楽器）/助手 鶴谷 幸（フルート）  
卒業生 大塚博章（バス）真野亜莉沙（トランペット）林 京平（ピアノ）

## GINZA YAMAHA TAMAGAWA MUSIC DAY 2012

2012/7/7 (Sat.) ヤマハホール

17:00開演 芸術学部教員による演奏会—瞬—

Pf. solo チェコ舞曲集 第1集より イ短調/演奏会的練習曲 海辺にて  
/スメタナ 金子奈津子 (Pf) (2009卒)

Vn. solo 序奏とタランテラ

/サラサーテ 原 徳子 (Vn) (2009卒)・金子奈津子 (Pf)

Euph. Duo 《ユーフォonium協奏曲》より ギリシャの踊り〜アンダンテ〜  
アレグロヴィヴァーチェ〜ウィルビー 荒木玉緒 (Euph)・中村岩城 (Pf)

Bar. solo 平城山/平井康三郎・ツバメが巣へ/クレッシェンゾ

柿沼伸美 (Bar)・原 牧人 (Pf)

Brass 金管五重奏のための小品集/マウレル

太田 聡 (Trp)・真野亜莉沙 (Trp)・風間克爾 (Hrn)・大内邦晴 (Trb)・鈴木敏之 (Tuba)

・・・・休憩・・・・

Guit. solo 枯葉/コスマ・スペイン/チックコリア 上田浩司 (Guit)

Sax. Duo デュオコンチェルト/サンジュレー・チェイサー/星出 尚

小池裕美 (Ten)・小峰松太郎 (Sax)・菊地智子 (Pf)

Pf. solo 練習曲 Op. 25-1・英雄ポロネーズ/F. ショパン 小佐野圭 (Pf)

Ensemble 室内オペラ《河童譚》/石桁眞礼生

吉村温子 (Sop)・山木奈保子 (Mez-Sop)・辻 裕久 (Ten)・馬場眞二 (Bar)・小佐野圭 (Pf)・  
松川 儒 (Pf)

---

専任教員 辻 裕久（テノール）馬場眞二（バリトン）小佐野圭（ピアノ）松川 儒（ピアノ）  
/中村岩城（オルガン）野本由起夫（司会）

非常勤講師 吉村温子（ソプラノ）山木奈保子（メゾソプラノ）荒木玉緒（ユーフォニアム）

柿沼伸美（バリトン）原 牧人（ピアノ）太田 聡（トランペット）風間克爾（ホルン）大

内邦晴（トロンボーン）上田浩司（ギター）小池裕美（サクソ）小峰松太郎（サクソ）  
菊地智子（ピアノ）  
卒業生 金子奈津子（ピアノ）原 徳子（ヴァイオリン）真野亜莉沙（トランペット）鈴木  
敏之（チューバ）

#### 4. 教員による作品発表

地下のスタジオで開催された2011年は、芸術学部MA学科所属教員による作品と卒業生の作品発表であった。現代音楽や電子音楽の研究者で同大学同学科の高岡明教授と光の芸術を探究する田中敬一教授、CG研究の第1人者赤山仁准教授を中心とした教員陣、そして卒業生の作品がコンサートの進行とともにレーザー光線を絡めたMA学科ならではの展開を魅せた。この発表は更に、一コンサートとしてだけではなく、イベントとして企画され、普段見せないその舞台制作の裏側を一般に公開し、学生のみならず、この分野に興味と将来の展望をさぐる各専門家の訪問を受けた。電子音とレーザー光線の融合性の探求や電子音と生の声による作曲者自らの出演で、最近あまり見られなくなった作品の自作自演の可能性とアイデアの発信に、特に学生らには大いなる参考と興味を抱いたようだ。また、コンサートの前に一日かけて制作した現場を公開し、そのセッティングと舞台裏を時間の制限なく提供することで、何よりMA各授業の直接的なフィードバックになったと確信している。

2012年は昨年と違う展開を模索し、PA学科のみでの実験劇場として、音楽教育プログラムが企画された。対象を見童から中高生とした音楽によるアウトリーチを模索した。担当は同大学同学科非常勤講師の谷川マユコで相談役として同学科教授、高須一が加わった。テーマは「音楽と共存した子供の成長過程の模索」で、絵本のようなプロジェクター画像の投影に、予め作曲された生の音楽（学生の作品）を演奏し、それを聞いた聴衆がイメージーションによって楽器を手にとって参加するものである。楽器は各種打楽器を主に鳴り物、玩具など多種多様である。当日は同学部の学生をモデルとして講座は展開された。結果として、これは一般向けのアウトリーチとして企画されたものだが、連絡や告知の遅れで対象相手が集まらず、成果を十分に上げる事が出来なかった事は報告しなければならない。もう一つの企画、高須教授の「音楽の謎を紐解く鑑賞ワークショップ」は都合により閉講。

#### MA学科2011 地下スタジオ公演 プログラム

##### HARMONICES MUNDI

玉川大学芸術学部メディア・アーツ学科マルチメディアコンサート

「さらに高みへ、

この世界の起源へと到達するため、

天空運動のハーモニーの階段を登るとき、

さらに音楽が必要である…」

ヨハネス・ケプラー

《Harmonices Mundi 世界の調和（宇宙のハーモニー）》より

上演作品目録

##### 1. 《Ambient Tide 1》(2006)

レーザー/ビデオ：田中敬一、CG：赤山 仁、

作曲：Johnathan F. Lee、高岡 明

2. 《つうばなつばな》《夜に咲く花》(2011、2010)

作曲/演奏：石井里奈、ライトアート：柏原エリナ、技術：岩崎 修

3. 《光の層 Layer of lights》

作曲：今堀拓也、笙：中村華子、ピアノ：朝川万里、映像：中西宣人

4. 《Ascendant/Descendant》(2011)

作曲：Johnathan F. Lee、笙：中村華子、ピアノ：朝川万里

## 5. 対象を問わない一般向けアウトリーチ講座

ヤマハ銀座店の正面玄関から入った場所がロビーホワイエで、そこに展示されたピアノの前で、ピアノを使用しながらの講座は、告知によって集まる興味ある聴衆だけでなく、所謂一般客をも巻き込んだアウトリーチが企画された。企画は2011年は3本立て、2012年は2本立てで、専門性だけでなく偶然に居合わせた聴衆へも興味深い内容が計画され、音楽世界の広がりや基礎的知識の周知を狙ったアウトリーチ活動を展開した。

各講座は、2011年は辻裕久教授による「英語の歌を歌うということ」、小佐野圭教授による「演奏に指の体操を生かそう」、そして野本由起夫教授による「名曲探偵が語るF.リストの秘密」であり、2012年の企画は引き続き小佐野圭教授による「演奏に指の体操を生かそう Part2」、野本由起夫教授による「名曲探偵の音楽鑑賞術」であった。いずれも各教授の研究テーマから来る専門性深い内容を、模範演奏や様々な音源、そして映像を駆使し、それぞれ観光客にでも判る語り口と親近さで、提示して見せた。聴衆も立ち見状態で大変好評であった。

## 6. 修得成果の社会的な教育評価

### ～オーディション合格者（学生）による特別演奏会～

これまで玉川大学では学内オーディションを実施し、その合格者には学内にて開かれる特別演奏会への出演を許可してきた。その特別演奏会を外部で、しかも日本を代表する企業の銀座店で開催できるまさにこの特別な機会は、企画当初よりGINZA YAMAHA TAMAGAWA MUSIC DAYの目玉企画でもあった。出演した学生への学外での評価の意義が、かけがえのない宝である事は、我々演奏家から見ても確信できる。遑ってオーディションではこれまでとはうって変わった厳しい審査となった。これは、普段の学内演奏会では緩い時間枠が、この銀座では、企画上1時間しか確保できない点や、何より学外での確固たる評価のため、よりよい質をめざした点にある。実はこの狭い枠を狙って受験者は例年になく多く、また大変質の高い激戦となった。これは2012年度へも引き継がれ、よって学内での学生の演奏の質と音楽へのモチベーションが上がった成果は揺るがない事実である。

学外での演奏披露は教育上に於いても多大な効果をもたらす。専門性だけを誇示しただけでは人間社会を生きぬく術が充分でない事は周知の事実だが、出演者は学外での打ち合わせからリハーサルや本番を通して、社会人としての作法の修得を企業のもとで学べるまたとない機会であろう。コミュニケーションの実地訓練を舞台を抱えながら、究極の状態での学習する事は、個人の演奏の反省のみならず、社会人としての振る舞いをフィードバックできるまたとないチャンスでもある。そしてこれは出演者のみならず、聴衆として来館した学生にも作法やマナーの習得、立ち居ふるまいの学習でもあった。

## 7. 今後への反省点

これまで2度にわたり開催された当企画であるが、その告知はまだまだ狭い世界の領域を出ていない。これは聴衆の顔ぶれからも推察がたやすい。告知は一般音楽情報誌に2011年は半ページ、2012年は全ページで有料掲載。他の業界誌にもいくつか掲載されたが話題としては特別大きくならず、告知と広報の至らなさはまず第1の反省点である。教員個人の研究発表から、大学芸術学部の音楽活動発表、そしてアウトリーチ活動もその内容から考察するに、小規模でまだまだ社会還元と言うにはまだまだ距離感を覚える。企画としては、当大学の芸術学部は音楽のみならず芸術分野に広く開かれ、専門分野も多岐にわたる。今後はそれを生かした形での改善も必要とされるだろう。また、更に拡大するに他の学部との共同発表という形で音楽を絡ませた社会貢献も考察できるはずである。

## 8. おわりに

定期的に大学の教員が共同で演奏会を打つ企画は、他大学にも見られる事ではあるが、その内容がある一大テーマのもと、演奏会のみならず一日企業を借り切り、各種割引などの企業努力による特典還元も付いた全面協力を得ての企画は他に類が無い。これは大学教員の公の審判も覚悟のFD活動にほかならない。少子化で大学の存続危機も叫ばれるが、大学教員としては、対象の親子に魅力的な教員である事も必須であるため、自らの研究を様々な形で大学企画として世に問う必然性もあるだろう。

教員自らの研究の検証と教育活動の成果の見極めとしては、本企画はうってつけであると自負している。文化が持続、継続することの意義は何より不可欠であるし、時代の変遷と共に社会への発信度を変化させ各学府にも学生個人へも還元できるよう質の高いイベントを保証しなければならない。また、今後は対象を日本人に限定せず、世界に発信して行くべきであろう。